台大日本語文研究第 20 期
2010 年 12 月，頁 93-116
2010-09-06 收稿，2010-11-30 通過刊登

日語外來語與漢語之「造語成分」的對照分析
—以「オール」和「全」為例—

林慧君*

摘要

本篇論文主要是對照分析日語不具有獨立用法的粘著詞素之（即日語的「造語成分」）外來語「オール」及在語意上相對應的漢語「全」，闡明此二者一般視爲所謂類意詞的外來語及漢語粘著詞素之間的語意、構詞上的異同，以及前後文句法上的特徵等爲主要目的。

透過本篇論文的探討，在語意用法上，首先考察了「オール」及「全」的所有語意用法，特別是論述了「全て（が）～」「全ての」「～全体」三者之間的差異。此外，也闡明了「オール」的主要用法是「全て（が）～」，而「全」的主要用法爲「全ての」，二者在語意層面上呈現角色相互互補的現象。

另外，在構詞層面上也探討了「オール」和「全」之間種種的異同及特徵。特別是從語意與構詞之間的關聯性，分析了「造語成分」「オール」和「全」其具有連接詞基和接頭詞的中間詞素之性質。此外，也論述了具有「全ての～」和「～全体」之兩義性的「全～」其構詞以及前後文脈的一些特徵。

關鍵詞：「造語成分」、構詞、語意用法、外來語、漢語

* 台灣大學日本語文學系副教授

The contrastive analysis of Japanese Bound morpheme in Loan words and Kango: the case of “オール” and “全”

Lin, Hui-jun*

Abstract

Some kinds of morpheme have no independent usage and used as compound words, which is so-called “bound morpheme.” In this paper, I would like to examine the loanword morpheme ”オール” and the *Kango* morpheme ”全” which semantically corresponds to it by contrastive analysis of the meanings, differences, and the characters in context or sentence structure between the two words that seems like synonyms.

Through study of this paper, first, on the semantic side, I should demonstrate that all the meanings which belong to ”オール” and ”全”, and classify these meanings into three categories （「全て（が）～」,「全ての」,「～全体」）. Second, I would like to point out the main usage of ”オール” is 「全て（が）～」 and ”全” is 「全ての」, also analyze the two words are not complementary distribution but division of roles.

On the other hand, on the side of word formation, this study discovers the various characteristic and differences of ”オール” and ”全”. Through analyzing the relationships between their meanings and word formation, I made out that ”オール” and ”全” are bound morphemes assume an intermediate character from base to prefix. Other, I also refer to「全て～」which has double meanings by analyzing its word formation and the character in context.

Keywords: bound morpheme, word formation, meaning, loan words, *Kango*

* Associate Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

造語成分としての外来語と漢語の対照分析
―「オール」と「全」を例に―

林慧君*

要旨

本稿は、自立用法を持たず、結合用法専用の成分として働く、いわゆる「造語成分」としての外来語成分「オール～」と、それと意味的に対応する漢語成分「全～」とを対照分析することにより、類義語どうしと思われる両者の意味用法、語構成における異同、文脈構文上の特徴などを明らかにすることを目的とする。

本稿の考察を通して、まず、意味用法の面では、「オール」と「全」のもつあらゆる意味用法を明らかにすることができた。特に、「全て（が）～」「全ての」「～全体」という三種類の用法を区別し、その違いを論じた。また、「オール」の主用法は「全て（が）～」で、「全」の主用法は「全ての～」であること、またそれらは相補的分布ないし役割分担を示していることも解明した。

一方、語構成の面においても、「オール」と「全」における様々な特徴や異同を見出すことができた。特に、意味と語構成との関わりから、造語成分「全」と「オール」の語基から接辞へと中間的な形態素としての性格を分析できた。他に、「全ての～」と「～全体」という両義性をもつ「全～」についてはその語構成や文脈上の特徴も言及できた。

キーワード：造語成分、語構成、意味用法、外来語、漢語

* 台湾大学日本語文学系副教授

造語成分における外来語と漢語の対照分析
－「オール」と「全」を例に－

林慧君

一、はじめに

日本語形態素としての外来語には、元々の外国原語では自立用法の形態素であるものの、日本語に借用されると、その自立用法を失い、結合専用の成分として働くものがある。例えば、「ホーム」「ニュー」などであるが、これらは様々な構成要素と結合し、日本語の造語に大いに寄与しており、語基と接辞との中間的な造語性格をもつことから、一般に「造語成分」と言われる[1]。

本稿では、そのような造語成分としての外来語成分「オール」を例に挙げ、意味的に対応する在来語成分「全」と対照することを通して、類義語どうしと考えられる外来語造語成分と在来語造語成分の意味用法の異同、語構成における異同や特徴などを明らかにしようとする。

日本語の語構成要素に関する語構成論的な考察は、従来から数多く行われており、特に漢語成分についての研究成果には著しいもの[2]があるが、外来語と在来語を対照して扱ったものとしては柳原（1991）や陣内（1993）などがあるものの、その殆どは、語構成要素レベルではなく、「スローガン」と「標語」や、「スプーン」と「さじ」といった単語レベルのものを対象とし、その意味分析や文体、位相差などを中心に論じたものである。本稿で行おうとする、外来語造語成分と在来語造語成分に関する、意味や語構成の立場からの比較分析はまだ見当たらない。

---

[1] 山下（1995･2006）と林（2009）を参照。

[2] 野村雅昭氏の二字、三字、四字漢語などの一連の、漢語の構造についての考察を始め、「―的」「―性」「―化」「無―」「不―」「新―」などの漢語接辞的要素に関する論考がまさに枚挙にいとまがない。

二、考察の対象と目的

本稿では、外来語造語成分と在来語造語成分の意味や語構成を比較分析する試みとして、意味的に対応していると思われる「オール」と「全」を取り上げることにする。

考察の用例は、まず、「オール」と「全」の造り上げる複合語（以下、それぞれを「オール～」「全～」と略称する）の例を、『朝日新聞記事データベース』（CD-HIASK 1999 年と 2004 年）と「インターネット goo 国語辞書」から収集する。ただし、朝日データベースからの収集例は、「オール」の場合、「オールセーフ」などの外来語成分との結合した外来語複合語や「オール主婦」といった在来語成分と結合した混種語の例は、1999 年と 2004 年から集めるが、一方、「全」のほうは、「全ジャンル」のような外来語成分と結合した混種語も 1999 年と 2004 年から取り集めるものの、「全席」「全世帯」「全市町村」などのような漢語成分と結合した漢語複合語は 2004 年のみからピックアップすることにした[3]。

なお、本稿は日本語の造語レベルでの分析なので、「オールナイト」（all-night）「オールスター」（all-star）などの外国語から直接借用した音訳複合語は論外にし、「オールカラー」「オールロケ」などのような和製の外来語複合語だけを考察の対象とする。また、「オール満点」「オール一本」などといった「オール」が漢語成分と結合した和製混種語も分析の範囲に入れておく。

それから、「全」を含む複合語は全て和製語であるが、そのうち、「全人」「全般」のような、語構造分析ができない、いわゆる熟語の例や、「全裂」のような既に意味が特殊化したもの、また、「全身全霊」「全知全能」といった四字成句、そして、「全国紙」「全方位外交」などの如く、「全」を含む複合語が更に他成分と二次（以上）結合し

[3] 朝日データベース 2004 年における、「全」を含む漢語複合語の例に関しては、当データベースに三回以上出現した例だけを本稿の考察例に収録した。
なお、「全」が外来語成分と漢語成分以外に、和語成分と結合した例もあるが、本稿の調査では「全売上高」「全取締役」「全株式」「全株」と 4 例しかない故、さしあたってそれらを論外にしておく。

た例も、全部分析の対象外にする。ちなみに、「オール読物」「オール阪神・巨人」や「全労連」「全共闘」などのような「オール」か「全」を含む固有名詞、または固有名詞からの略語も省くことにした。それから、収集した「全」を含む漢語複合語の例は、更に「全学」といった二字漢語と、「全教員」「全加盟国」のような三字以上の漢語複合語に分けて考察を進める。

次節からは、「オール」を含む複合語と「全」を含む複合語に関して、まず、それぞれの意味用法を記述した上で、両者の意味用法の異同などを明らかにする。次に、それぞれの意味用法に属する語例について、語構成的な観点からも論述し、「オール」と「全」における意味用法と語構成における異同や特徴などを解明しようとする。

三、「オール～」と「全～」についての分析

『日本国語大辞典』に「オール」と「全」の意味を求めてみると、次の通りである[4]。

「オール」については、

①あるものの構成要素、成分が「すべて…である」の意。「オール―ナイロンの靴下」「学校の成績がオール五」

②テニスや卓球などで、点数を数える時に、「双方とも」の意でつかう。たとえば、双方が二点のときには「オール―ツー」または「ツー―オール」という。[5]

③「全…」「すべての」「その期間ずっと」などの意。「オール日本」「オールスター」「オールナイト」

＊アルス新語辞典〔1930〕〈桃井鶴夫〉「オール 英 all すべての、皆の」

---

[4] 『日本国語大辞典，ジャパンナレッジ（オンラインデータベース）』を参照。

[5] この②は限定特殊な用法であり、本稿の考察の主旨とは無関係な故、分析の考慮から省いておく。

それから、「全」については〔接頭〕という項目の説明を次に掲げる。

① 身分や立場を示す名詞の上について、その立場にあるもののすべてという意を添える。「全学生」「全国民」など。

② 下にくる語の意味や内容のすべてを含んでいるという意を添える。「全世界」「全日本」「全収入」「全責任」など。

上の辞書の説明からして、その意味内容が「オール」と「全」でおおむね類似しており、いわゆる類義語どうしと言えるが、その説明はおおざっぱと言わざるを得ない。また、「全」の説明に関して言えば、後接する要素が漢語成分ばかりとなっており、たとえば「全チーム」のような、「全」と外来語成分と結合する混種語の場合などについては言及がなく、果たして漢語成分と結合する場合と同じかどうかなど、明確でないところもあると思われる。従って、「オール」と「全」にその意味用法、また後接要素などの語構成的な面において如何なる異同があるのかを、更に究明する必要があるように思われる。

（一）「オール～」の意味用法

「オール」が他の成分と造り上げた複合語の意味用法は主に、「全て（が）～」と「～全体」と二つにまとめられる。

まず、上に引用してある①解釈の例「オール―ナイロン」「オール五」のように、これらの複合語は、「全て（が）ナイロン」「全て（が）五」という意味と捉えられる。そして、新聞から調べた次の、

「…、赤と黒が基調の衣装にオール漢字のチーム名。」（朝日 1999.6.18）

「…「カシオペア」は、オール二階建てで国内初の全室個室タイプ。」（朝日 1999.7.18）

も、6 月 18 日の例は「チーム名は全て（が）漢字」、そして 7 月 18 日の例は、「「カシオペア」は、（車両の）全てが二階建て」と解釈す

ることができる。つまり、文中に述べてある主題（「チーム名」「カシオペア」（の車両））について、その主題自身または主題に関わる構成成分などの全てが後接要素の表しているものまたはこと（「漢字」「二階建て」）である、と叙述限定をしていると分析できる。即ち、これらの[オール＋後接要素]という語構造をもつ例は、「…は、全て（が）＋後接要素]という一種の叙述型の「～は～が…」構文[6]の意味を表しているのである。ここで、「全て」の後の「が」を（　）で記したのは、「チーム名は全て漢字」「「カシオペア」は全て二階建て」というように、「が」の介在しない形の「全て…」として副詞的にはたらくことがあるとも考えられるからである[7]。

今回の調査でこの「全て（が）～」という意味を表す「オール～」の用例が 29 例（81%）あることから考えるに、これが「オール～」のより一般的な意味用法のように思われる。そして、語構成的に見ると、「オール」に後接する要素は様々であり、外来語成分や漢語成分が最も多く、他に和語成分や混種語成分なども見られる。例えば、

「オールスタンディング」「オールロケ」「オールセット」
「オールガラス」「オール無料」「オール主婦」「オール満点」
「オール与党」「オール日本人」「オール一本勝ち」
「オールデジタル化」「オールアドリブ芸」…

などが挙げられる。

次に、「オール～」が「～全体」という意を表す用法であるが、例えば、

「論文誌をはじめオールジャパンの研究情報発信システムを一体的に整備しなければならない理由がそこにあります。」（朝日 2004.7.4）

「…だけの街づくりではなく、オール大阪、オール関西の拠点

[6] 叙述型の「～は～が…」構文に関しては、野田（1996）P.249-252 を参照。
[7] 「オール～」のこの「全て（が）」の用法は、後に述べる「全～」の「全て、全部」という意の副詞的な用法と類似しているが、その違いについては第四節でまた触れることにする。

として位置づける…」（朝日 2004.3.3）

「天神の地名はオール九州のブランド。」（朝日 2004.3.23）

「最終処分場を広域的な処分場でということになれば、オール愛知という見地に立って、協議のテーブルにはつかざるをえないだろう…」（朝日 1999.3.26）

「…沖縄経済の軸となる銀行を「オール沖縄」の経済界で支えることになった。」（朝日 1999.8.14）

「その原点を全員に振り返り、組の枠を超えた「オール宝塚」精神を取り戻したい。」（朝日 2004.1.5）

などである。これらの例は「オール」に後接する要素がいずれも地域固有名詞ばかりであるのが特徴的であり、「その地域全体」という意を表している。言わば、[オール＋地域固有名詞]という語構造パターンで、“地域全体としての一まとまりの総体”という意味を表し、強調しているのである。故に、政治、経済やスポーツなどの団体全体としての意識が高く、強調される分野の語彙で多く用いられている[8]。

今回の調査では、この「～全体」という意味用法を表す「オール～」の例が上に挙げた 7 例だけ見つかったが、これは前の「全て（が）～」という用法の数に続くものである。それほど多いとは言えないが、造語の自由さからして、生産的な用法だと考えられる。[9]

（二）「全～」の意味用法

「全～」の意味用法は「オール～」に比べて少し多様化しているが、主に次の四種類の意味用法にまとめられる。

---

[8] スポーツ関係の場合、「オールジャパン」「オール慶応」「オール兵庫」などのチーム名が見られるが、これこそ、スポーツの団体全体としてのまとまる総体の意識が高いと窺われよう。本稿では固有名詞を対象外にしておいたため、本文にはこれらのチーム名の例を挙げていない。

[9] 書き出しに書いた通り、「オール」は本来日本語に入る時、英語の自立用法をもたない、結合専用の造語成分として借用されてきたが、最近若者言葉として「オールでカラオケ」「オールで飲み会」などのように自立要素としての用法が見られるようになった。これは、英語「オールナイト」（all-night）からの略で、ネットで調べると「オールで騒ぐ」や「オールでトランプゲーム」などの如く、殆ど「一晩中、夜通し遊び通す」といった場合に使われているようである。かなり限定されている用法と見られよう。

（1）「全ての～」という意。

（2）「～全体」という意。

（3）「全ての～」と「～全体」という両義。

（4）副詞的な用法

まず、（1）の「全ての～」という意味用法について、新聞から拾った用例で見ると、

「負担の多い遊撃手で全イニング出場中」（朝日 2004.5.2）

「発泡酒の国産全ブランドを 100％天然水仕込みにする」（朝日 2004.12.2）

「それには英語に限らず、全教科について、批判的な視点で読書をしていくや…」（朝日 2004.1.21）

「イラク当局、全加盟国に「あらゆる適切な手段を講じ全面的に協力する」よう求めている。」（朝日 2004.4.22）

などのように、[全＋外来語成分]と[全＋二字以上の漢語成分]の複合語はいずれも[全ての＋後項要素]という意で解釈できる。これらは、「全」が後接する名詞成分の数量の全てが該当すると限定する、つまり、造語成分「全」が後項要素を連体修飾する関係にあると言える。

これらは、「全」を含む二字漢語の多くが、辞書の意味解説において「全ての～」という意でなされている例が少なくないことからもわかる。例えば、

「全品」：全部の商品や品物。

「全員」：所属しているすべての人。総員。

「全額」：全部の金額。総額。

「全問」：全部の問題･質問

などが挙げられる[10]。

今回の実例調査の結果をみると、「全ての～」という意味用法が、特に[全＋外来語成分]と[全＋二字以上の漢語成分]という語構造の

[10] 『インターネット goo 辞書』を参照。以下、「辞書」から引用した「全」を含む二字漢語の語例とその意味の説明、解釈も同じ。

用例の中で、それぞれ 68 例と 119 例[11]もあり、最も多く見られる意味用法ということがわかった。ところが、それに対し、[全＋一字漢字]という二字漢語の場合は、上述した二つのタイプに比べてだいぶ少なく、33 例のみである。下にこの「全ての」という（1）の意味用法に属する語例をもう少し挙げよう。

「全ジャンル」「全エネルギー」「全レコード」「全サイト」…

「全楽団員」「全医療機関」「全機種」「全球団」「全天候型」…

「全室」「全車」「全機」「全駅」「全作」「全科」「全品」…

次に、（2）の「～全体」という意で解釈できる例を見てみよう。

「民主化の動きは、インドネシアやマレーシアをはじめ、全アジアの潮流だ。」（朝日 1999.1.22）

「教科書会社には全ページ数の 1 割程度まで、...」（朝日 2004.3.31）

「一個の人間の全生涯をかけて、呼応しあっているかとも思う。」（朝日 2004.2.8）

上述した新聞の実例からわかるように、これらは、「全」によってその複合語全体が後項要素の全ての範囲に及ぶ、一まとまりとしての総体をさすことになると解釈できる。これは、前に論じた「オール九州」などのような「オール～」の「～全体」という 2 番目の意味用法と同じなのである。ただし、地域名などの固有名詞としか結合しない「オール～」と違って、この「～全体」という意の「全～」は、その後接要素として地域固有名詞も、そして普通名詞も見られる。例えば「全欧州」「全機種」「全キヨスク」「全シリーズ」などである。なお、「全」を含む二字漢語の場合も、この「～全体」という意味用法をもつ例が存在している。

「全円」:（半円などに対して）円の全体。

「全身」: からだじゅう。からだ全体。総身。渾身。

[11] 本稿の（1）と（2）用法の調査例の数値は、それぞれの用法しかもたない例、またはそれぞれの用法が他の用法より圧倒的に多い例をカウントしたものである。なお、（1）と（2）をともにもつ、いわゆる両義用法の(3) は、（1）と（2）の用法の数が拮抗しているものを指している。（3）の用例は、（1）と（2）にはカウントせずに （3）のところだけに計数した。

「全土」: 国土全体。国じゅう。

「全学」: その大学、また学園全体。学内全体。

今回の実例調査による、この、「～全体」という意味用法で用いられる「全～」の用例数を、語構造別に示すと、

[全＋外来語成分]、10 例

[全＋二字以上の漢語成分]、15 例

[全＋一字漢字]、26 例

となっている。上の調査例数によって、[全＋外来語成分]と[全＋二字以上の漢語成分]の語構造においては、この（2）「～全体」という意を表す例が、前述の（1）「全ての～」という用法をもつ例（68 例と 119 例）より断然少ないことが明らかになった。一方、[全＋一字漢字]という二字漢語の場合は、前述した二種類の語構造の例より多く、また、同構造の二字漢語の（1）「全ての～」という用法例（33 例）とはそれほど隔たりをもたない。言わば、(2)「～全体」という意味用法も、「全」を含む二字漢語の普通の用法である。

以下、この「～全体」という（2）の意味用法に属する例をもう少し挙げておく。

「全シリーズ」「全イースタン」「全ウエスタン」…

「全人格」「全世界」「全関西」「全中国」「全期間」…

「全域」「全国」「全線」「全都」「全文」「全米」「全欧」…

ところが、上述した（1）と（2）の二つの意味をともに有する（3）の意味用法も存在する。まず、「全」を含む二字漢語の例について、その辞書の意味解釈から見てみよう。

「全社」: ①その会社全体。②すべての会社。

「全軍」: ①すべての軍隊。②ある軍隊の全員。

「全州」: ①ある州全体。②すべての州。

「全日」: ①一日中。まる一日。②毎日。

辞書の説明通り、「全社」などのこれらの二字漢語は皆「全ての～」及び「～全体」という両義をもつわけである。今回の調査では、この両義を持つ二字漢語の例を 7 例あったが、そして、 [全＋外来語

成分]と[全＋二字以上の漢語成分]という語構造の場合も、今回の調査ではこの（3）の「全ての～」及び「～全体」という両義をもつ語例は、それぞれ 9 例と 11 例収集できた。いずれも語例数が（1）と（2）の意味用法のより少ない[12]。具体的な実例を下に挙げる。

「計画では、7 階建てのビル（店舗面積約 8 千平方メートル）のほぼ全フロアにビッグカメラが入る。」（朝日 2004.10.29）

「3 階の全フロアを占めた呉服売り場で、ウールの実用「きもの 10 万反セール」を開催。」（朝日 2004.5.29）

「全住民が自由に往来できるようになって欲しい。」（朝日 2004.8.28）

「河沿いの袋地区で、全住民の 92%に当たる 86 人（平均年齢 47 歳）の行動を確認した。」（朝日 2004.9.11）

たとえば、10 月 29 日の例の「全フロア」とは、前に述べた「7 階建てのビル」の「全てのフロア」をさしているが、一方、5 月 29 日の例では「全フロア」の前に「3 階の」という限定修飾語があるため、この場合は「3 階フロア全体」を表しているのである。そして、8 月 28 日の「全住民」も、「全ての住民が自由に…」というように解釈できるのに対し、9 月 11 日の「全住民の 92%」というのは、「住民全体」を一まとまりの総体としてそのうちの 92%ということである。上の実例からも明らかであるように、「全～」のこの両義性は文脈に依存するところが大きいことがわかる。

以下、この「全ての～」及び「～全体」という両義をもつ（3）に属する例をもう少し挙げておく。

「全コース」「全ルート」「全ページ」「全スタッフ」…

---

[12] 注 10 にも述べたが、本稿で（3）の意味用法のものとしてカウントしている用例は、(1) と(2)の用法が拮抗している例のみである。(1) と (2) の両用法を有するが、実例調査によってどちらかの偏りが認められたので、(1) か (2) に計数した例をも、この (3) に数えると、(3) の用例数は更に増えるはずである。なお、ネット goo 辞書に両義の用法が記載されているものの、今回の実例調査ではどちらかの用法しか収集できなかった例、例えば「全戸」((1) のみ)「全店」((1) のみ)「全市」((2) のみ)「全村」((2) のみ) などがあった。辞書の意味解釈と実例に用いられている意味用法の間には食い違いが見られたわけである。

「全有権者」「全自治体」「全住民」「全人類」「全財産」…

「全党」「全県」「全景」「全隊」…

最後に、「全～」の副詞的な意味用法として、「全て、全部」及び「すっかり、完全に」と解される用例がある。

まず、「全て、全部」という副詞的な意味用法が挙げられるが、例えば、

「全納」: おさめるべきものを全部おさめること。

「全訳」: 原文を残らず翻訳すること。また、その訳文。完訳。

「全廃」: 全部廃止すること。全くやめること。

などは、造語成分「全」が後接する動詞的な成分に対して、「全て、全部」という量的な側面から連用修飾していると考えられる。この意味用法は前述した「オール～」の（1)「全て（が）～」と類似しているが、異なる点もある。その相違は次の第四節で論じることにする。

今回の調査ではこの用法の語例が 16 個収集できた。語構造的にみると、この用法の例は、外来語成分を有する複合語には見当たらず、[全+漢語成分]という語構造にのみ見られるが、「全」を含む二字漢語のほうが多く、11 例あるのに対し、「全」を含む三字以上の複合漢語は 5 例[13]のみある。「全て、全部」という「全」の副詞的な用法は、二字漢語熟語のほうに集中している意味用法だと思われる[14]。他に、この意味用法として用いられる例として、「全休」「全開」「全焼」「全通」「全摘」「全勝」「全敗」「全滅」などがある。

「全て、全部」という意の他に、造語成分の「全」が「すっかり、完全に」という副詞的な用法を表すのもある。例えば、

「全壊」: すっかりこわれてしまうこと。

「全癒」: 病気がすっかりよくなること。

---

[13] 「全摘出」「全半焼」「全半壊」「全公開」「全自動」。

[14] 今度の調査には、この副詞的な用法をもつ、「全クリ」という例があったが、これは、「全面クリア」という語からの略語と考えられ、「全」と他の要素が結合した複合語ではない。なお、ゲーム関係だけに用いられ、用法がかなり限定され特殊化している。

「全備」：十分に備わること。完全に備わっていること。

などでは、「全」が後接する成分を、「すっかり、完全に」という状態や程度で限定修飾していると見られる。前の「全て、全部」という副詞的な用法は主に量的な面から「全」に後接する要素を限定しているのに対し、この「すっかり、完全に」の用法は、質的な面から「全」の後の要素を限定して連用修飾している、という違いが見受けられる。

今回の調査で見つかった、この意味での例は、「全」を含む二字漢語の場合が殆ど（7例）であり、「全」を含む三字以上の複合漢語は僅か1例（「全否定」）しかない。即ち、「すっかり、完全に」という「全」の副詞的な用法も二字漢語熟語に集中している意味用法だと考えられよう。この用法に属する例として、他に「全快」「全盛」「全裸」「全盲」なども挙げられる。

上述した如く、この副詞的な用法を表す「全～」の造語は、大体二字漢語熟語に止まっているように見られ、前述した三種類の意味用法に比べると、それほど生産的ではないと明らかにできたであろう。

以上、外来語造語成分「オール」と漢語造語成分「全」の意味用法を検討してきたが、次節では両者を対照比較しながら、その意味用法と語構成における異同や特徴をまとめ直したい。

四、「オール～」と「全～」の比較

第三節で分析した「オール～」及び「全～」の意味用法を表にして整理してみると、次の通りになる。

表一　「オール～」と「全～」の意味用法及び語例数[15]

	オール～		全～			
	意味用法	語数	意味用法	語数（後接要素別）		
				＋外	＋二字	＋一字
接辞的			全ての～	68	19	33
↑			両義	9	11	7
中間的	～全体	7	～全体	10	15	26
	全て(が)～	29				
↓			副詞的：全て、全部		5	11
語基的			副詞的：すっかり、完全に		1	7

まず、ここで、副詞的な用法を除く、「全て（が）～」「全ての～」「～全体」という、三つの類似した意味用法の内容の違いを、もう一度見てみよう。

たとえば、

- 「全て（が）～」という意味用法

  「外国人を初めてメンバーに迎えたのは八一年。「オール日本人」へのこだわりもなかったわけではないが、…」（朝日 1999.10.18）

- 「全ての～」という意味用法

  「…、総額 40 億円をかけ全会員に 500 円相当の金券を送る」（朝日 2004.2.28）

- 「～全体」という意味用法

  「全学生 600 人のうち、部員が 150 人ほどを占めていた。」（朝日 2004.7.20）

の例から考えてみよう。「全て（が）～」は、「オール日本人」が「そのメンバーは全て（が）日本人だ」に言い換えられるように、主題に対して「全て」という数量的な側面で叙述、限定する用法である。次に、「全ての～」は、「全会員」からわかるように、たくさんの会

[15] 表中の後接する要素の略称の意味は次の通り。「外」は外来語成分、「二字」は二字以上の漢語成分、「一字」は一字漢字をさす。

員がいて、その「一人一人としての全て」という用法である。また、「～全体」は、「全学生」の例から、学生一人一人をさしているのではなく、「学生全体を含む一まとまりの総体」を意味する用法と解釈できる。

以下、「オール～」と「全～」における、意味用法と語構成面での異同や特徴を論じていくことにしよう。

まず、共通している点から見てみよう。「オール」と「全」は、第三節の冒頭にあげた、辞書における意味用法の引用からは、意味的におおむね類似しており、いわゆる類義語どうしと思われる。しかし、前掲した表一からもわかる通り、「オール～」と「全～」との間に共通しているのは、「～全体」という意味用法のみである。

ところが、この「～全体」の場合においても、後接要素には違いが見受けられる。「オール」に後接する要素は、「九州」や「関西」、「沖縄」などといった地域固有名詞ばかりで、地域全体の一まとまりの総体・団体としての意識が強調されている。それに対し、「全」の後接要素は、地域固有名詞（「全欧州」）や、外来語成分（「全シリーズ」など）、二字以上の漢語成分（「全人格」など）、一字漢字成分（「全域」など）、さらには混種語成分（「全ページ数」など）と様々である。なお、「全」に後接する要素は、例えば、「全宇宙」「全世界」「全期間」「全人格」「全生涯」「全中国」「全貌」「全身」「全円」などのように、個別的ではなく、細分化もできない一まとまりを表すものが多く観察される。このような意味特徴から、「～全体」という意味用法が全ての部分、範囲を含む一まとまりの総体を表すものであることがうかがえる。

次は、相違点を見てみよう。

その一つとして、代表的な用法の違いを挙げることができる。表一から、「オール」の場合は、「全て（が）～」の用法が 29 例と、約 8 割を占めているのに対して、一方の「全」は、「全ての～」の用法が 322 例のうち 220 例とあり、約 7 割近く（68%）を占めている、とわかる。要するに、「オール」は「全て（が）～」、「全」は「全て

の～」がそれぞれ代表的用法と言えよう。なお、ここで興味深いのは、一方の代表用法が他方には見られない点であり、言わば相補的分布もしくは役割分担を見せていることである。

二番目に、類似しているとも思われる、「オール～」の「全て（が）～」用法と「全～」の副詞的な用法の相違点を見てみよう。まずは、「オール～」は外来語成分や複合漢語や混種語などと自由に結合するものの、一字漢字とは結合しないが、それに対し、「全～」の副詞的な用法は「全」を含む二字漢語のほうに集中し、また造語がそれほど活発ではない、という造語における違いを指摘すべきであろう[16]。

それから、両者の違いは後接要素の性格にも求められる。「全て（が）～」の意の「オール～」は、「オールガラス」「オール野党」「オール電化」「オールデジタル化」などのように、後接要素がいずれも名詞的な成分である。一方の、「全て、全部」という副詞的な用法をもつ「全～」は、「全休」「全開」「全勝」「全滅」「全優」などのように、いずれも動詞的な成分なのである。

この後接要素の品詞性の違いは、構文上の違いにもつながると思われるが、次の新聞の二例を見られたい。

> 「この日は決勝こそ優勢勝ちだが、それまでの三試合はオール一本勝ち。」（朝日 1999.1.17）
>
> 「第二十三師団捜査隊は戦場で孤立状態に陥り、日記が切れた五月二十九日、ソ連軍の猛撃を受けて全滅した。」（朝日 1999.10.18）

「オール一本勝ち」の例は、文中に述べてある主題（「それまでの三試合」）について、その全てが後接要素の表している内容（「一本勝ち」）である、即ち、「…は全て（が）＋後接要素]という一種の叙述

[16] 例えば、「…「全甲（オール 5)」の通信簿を受け取って得意になって帰った…」（読売新聞 1993.11.20）のうちの、「全甲（オール 5)」というのは、一字漢字と結合し漢語熟語を作り上げる場合は「全～」が用いられるのに対し、数字と結合する場合は後接要素には一字漢字以外にあまり制限のない「オール～」が選択されるわけである。これが正に、類似した意味用法をもつ「全～」と「オール～」における、相違なる造語制限を説明している例である。

型の「～は～が…」構文を示している。それに対し、一方の「全滅した」の例は、造語成分「全」が後接要素の動詞的な成分「－滅」に対して、「滅びる」程度を限定するという連用修飾構文を示すのである。言わば、「全て、全部」という意を表す「全」と動詞的な後項要素と結合してからの複合語全体が文において述語として初めて文を完結させるわけである。例えば、「授業料を全納する」「配給制度を全廃する」などの通りである。

ところで、「全～」を語構成的に見ると、表一からもわかるように、意味用法ごとに後接要素に特徴があるが、これからは「全」が接辞的なのか、語基的なのかの性格が見受けられる。

まず、「全ての～」という用法は、主として外来語成分との結合及び二字以上の漢語成分との結合に発達する傾向が観察された。一方、一字漢字と複合した例には「全ての～」という用法が少数で、前の二種類の語構成をもつ例よりも少ない。これらから考えるに、「全ての～」としての「全」は語基的な要素としてより、接辞的な要素として生産性を有していると思われる。

一方、副詞的な意味用法の例は、主として「全熟」「全勝」などのような二字漢語のほうに集中しており、これは「全」の副詞的な意味用法が語基的要素としてはたらいていることの表れであろう[17]。

そして、「～全体」は、一字漢字との複合語（「全」を含む二字漢語)が 26 例あり、[全＋外来語成分]と[全＋漢語成分]という二つの語構造の例（25 例）と同じぐらいの造語勢力を示している。これは、「全～」の「～全体」という用法は表一の中で、上の「全ての～」という語基的要素としての意味用法と、下の接辞的要素としての副詞的な用法の間にある、まさに中間的な性格を有していることを意味するものであろう。

[17] 注 3 に述べたが、本稿の考察例はインターネット goo 辞書、また朝日データベース 2004 年に三回以上出現した例のみにした。他に、二回以下の出現例または goo 辞書のみに見られる例も調べると、副詞的な用法としての「全」を含む二字漢語が 11 例もある。これらも、「全」の副詞的な用法は主に二字漢語に用いられる、語基的要素としての意味用法だという考えを更に支持してくれるものである。

ちなみに、「オール」の場合は、一字漢字とは結合しないこと、また、二つの意味用法の造語例の後接要素として外来語成分や複合漢語や混種語などといった様々な成分が現れることからして、「オール」の二つの意味用法は中間的ないし接辞的要素としての用法だと考えられる。

要するに、表一にある「オール」と「全」の意味用法は、上にいくほど接辞的、下にいくほど語基的な性格が強くなると見受けられよう。

最後に、「全ての～」と「～全体」という両義をもつ「全～」があり、その意味はかなり文脈に拠ると既に論じたが、特に[全＋ヒト名詞]という語構造の複合語は殆どこの両義性をもつという特徴が、本稿の実例調査から明らかになった。

例を挙げてみよう。

「老司小では事件後、全児童が集団登校するようになった。」（朝日 2004.1.29）

「流失したのは、全利用者の名前、性別、住所、電話番号、貸し出しの記録などの個人情報。」（朝日 2004.10.17）

「…イラク統治評議会の全議員が「イラク基本法」に署名したこと…」（朝日 2004.3.9）

これらの、「全」を含む複合語は「全ての～」という意味であるが、一方、

「外国籍の子どもたちが全児童の約 1 割を占める…」（朝日 2004.1.21）

「…、全利用者の約 4 分の 3 が利用中だ。」（朝日 2004.9.4）

「法案提出者としてウリ党と野党・民主労働党の全員が署名するなど、全議員の 6 割近い 171 人が賛同した。」（朝日 2004.7.15）

などの場合は、造語成分「全」を含む複合語が「～全体」という意味を表している。例文からもわかるように、後者は[全＋ヒト名詞]の複合語の後に比率を示す表現が来るという構文的な特徴が見られるのである。つまり、[全＋ヒト名詞]の複合語で後接要素のヒト全

てを含む、一まとまりとしての総体と把握し、そのうちの比率を言及しているのである。

五、おわりに

以上、類義語どうしと思われがちな外来語造語成分「オール」と漢語造語成分「全」について、共通する意味用法を有する一方、互いに異なる意味用法と語構成の側面も見せていることを解明した。

まず、意味用法の面では、両者のもつ全ての意味用法を明らかにすることができた。特に、「全て（が）～」「全ての」「～全体」という三種類の用法を区別し、その違いを論じた。その後、「オール」の主用法は「全て（が）～」で、「全」の主用法は「全ての～」であること、またそれらは相補的分布ないし役割分担を示していることにも触れた。

一方、語構成の面においても、さまざまな特徴を見出すことができた。まず、「～全体」という共通の意味用法の場合、「オール」の後接要素は漢語地名固有名詞が多いのに対し、「全」のそれは外来語や漢語などと様々である。また、「全～」においては、その意味と語構成との関わりにある相違も明らかにできた。造語成分「全」は、主な「全ての～」という意味用法が、三字以上の漢語または混種語の複合語に発達しており、生産性の高い接辞的な要素としての性格を有している。それに対し、副詞的な用法の場合は「全」を含む二字漢語の造語のほうに集中し、語基的な要素としての性格をもつものと考えられる。そして、「～全体」という意味用法は、上記した二つの用法の間にある、中間的な性格を有しているものと見受けられる。一方、「オール」の二つの意味用法は中間的ないし接辞的要素としての用法だと見られよう。「造語成分」というのは、接辞との区別があいまいで、接辞に対する語基としてもくくれない形態素と言われるが、本稿の考察からも、「造語成分」のその「語基から接辞へと連続的に位置する」といった中間的な形態素としての性格が論証で

きた[18]。

なお、類似している、「オール～」の主用法「全て（が）～」及び「全～」の「全て、全部」という副詞的な用法の差について、両者における語構成的な側面の違いから説明を試みた。

また、「全～」には、「全ての～」と「～全体」との両義性のある複合語もあったが、これらは特に[全＋ヒト名詞]という語構造をもつ複合語に多く見られ、その意味は文脈に依存するところが大きいことや、構文上の特徴などをも論じた。

今回の調査では、36 例の「オール」を含む複合語を拾うことができた。これは、「全～」のそれ（322 例）に比べると少数ではあるが、その後接要素には外来語や漢語や混種語などと制限なく様々な語種が見られ、外来語多用という現代日本の言語生活の中での、この外来語造語成分「オール」の行方を暗示しているかのように思われる。

参考文献

陣内正敬（1993）「『さじ』と『スプーン』: 外来語化と命名のゆれ」『言語文化論究』第 4 号（九州大学言語文化部）

野田尚史（1996）『新日本語文法選書 1　「は」と「が」』「第 25 章「～は～が……」構文」くろしお出版

野村雅昭（1988）「二字漢語の構造」『日本語学』5 月号（明治書院）

柳原伊織（1991）「日本語の語彙における外来語の役割―在来語との意味比較の試み―」『慶応義塾大学日吉紀要　言語・文化・コミュニケーション』第 8 号（慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会）

山下喜代（1995）「形態素と造語成分」『日本語学』5 月号（明治書院）

山下喜代（2006）「現代日本語の語構成要素―外来語を中心に―」『紀要』48（青山学院大学文学部）

林慧君（2009）「日本語の外来語造語成分に関する一考察」『台灣日

[18] 「造語成分」の、語基から接辞へと連続的に位置する中間的な形態素の性格に関しては山下（1995）を参照。

語教育學報』第 13 號（台灣日語教育學會）
『日本語学　特集　接辞』1986 年 3 月号（明治書院）

電子資料

『朝日新聞記事データベース』（CD-HIASK）1999 年・2004 年
『日本国語大辞典、ジャパンナレッジ（オンラインデータベース)』
『goo 辞書』（インターネット版）

【注記】本稿は「2010 九州大学比較社会文化学府・国立台湾大学日文系合同研究会」（2010 年 4 月 24 日、於九州大学）における口頭発表の内容に加筆修正を施し、まとめ直したものである。席上、多くの方々よりご教示を賜った。記して感謝申し上げる。